



★放送局のスタジオで練習にはげむ面々

た。八人の息は、演奏以上にまよあつてい。演奏慰問の話もすぐさまとまる。年末に思いつきで始めたパーティーは、六千円の寄付金を稼いだ。今までに二〇日近く各所で演奏を披露した。今では、子供からお年寄まで、おらが村には、ブルイヤングファミリーーズがいることを自慢に思っている。

生まれ出る「青い芽」の哀歓

「人生音楽」つまり「人生音楽」という計算は、ベートーベンならずともやれる。そして音楽は人の心をつかむことも確か。彼らは若さと美貌に加えて、楽器をかなでる才能を兼ね備えている。もちろん仕事もジャンジャンやる。かわいいう女の子が寄つて来ないはずがない。その中には、都会のこ、野良仕事、土の香を知らない者ももちろんいる。そしてもちろんそこには恋の芽が出る。しかし憎いかな、これは結婚にまで発展し

そうにない。なぜならおやじ達か「彼女はどうかね」と首を横に振るからだ。この二年間にこんな暗礁には何度かぶつかった。最近はやりの親子会議、この席上では、親父達はきまってる。「今の若者には、好きなようにさせたい」と理解の程を示す。しかし、問題が現実化すると、「それ迄しなくても村にも適当な女の子がいるじゃろう」と言い出すから話が通じない。

このような親父との意見の衝突は農業にもあらわれる。一妻二子と野菜二〇疇を作るのとどちらが収益が多だろうか。彼らは今個室をほしがっている。若者だけで悩み事を持ち寄り、解決への努力をする城がほしいのである。いずれも一年一年、年をとるとやほりつまるぬ別が一ついてくる。結婚についても、無難な道を選らぼうとする。「青い芽」をいつまでも保つことはむずかしい。それを彼らは最も恐れている。それだけに一人

酪農経営にかける親子協定

—山鹿市・坂崎さん父子の生活と意見—

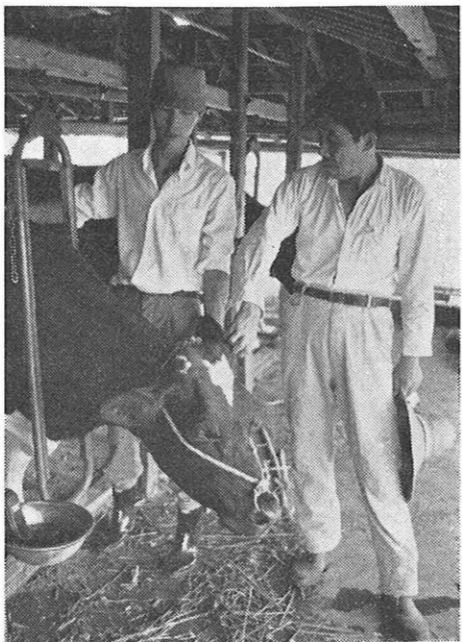
「農業には楽しみが少ないなどというのは熱意がないからですよ。山鹿市方保田で親子協定による酪農経営にとり組んでいる坂崎和也君（二四才）は、話がごと農業のことになると一段と熱っぽくなる。

和也君は、三十三年に中学を卒業するやいなや、なんのためらいもなく自分から酪農経営に飛び込んだ。それというのも父親の幸一さんが、酪農組合の指導員などをしていた関係もあって、酪農中心の家庭環境の中で育つ内、和也君の心に酪農への憧れが芽生えていたから。当時、幸一さんは酪農を専業としていたわけではなかったが、無から有を生みだす最たるものは酪農であるという信

念をもつ幸一さんが、和也君に賛成したのはもちろんだ。酪農経営は最善の方法ということで、父子の考えは完全に一致していたのである。

和也君は、卒業と同時に三頭の搾乳牛の管理を任せられた。既にこの時から親子協定が芽生えていたわけだ。そして二〇才までの六年間、和也君は幸一さんから酪農の基礎知識を徹底的に叩き込まれた。その間、三十五年には、幸一さんも酪農専業に踏み切った。そして和也君が基礎をマスターした三十九年から、本格的に親子協定による酪農経営が始まった。

坂崎さん父子は、毎朝三〇分から一時間は話し合いをするのが恒例だ。今年の目標、あるいは金銭の支出から返済、そして牛舎の設計など、とことんまで話し合いの上で決めていく。しかし、いつたんそれその責任分野の仕事になると、あくまで一対一の経営者の立場にかかわる。和也君の分担任である成牛管理には、幸一さんは絶対口をささない。だからわからない点は、和也君は普及所に、獣医師のもとに、あるいは酪農家のところ



★楽しい父子の対話

にと、どこにでも習いに行く。「教えることはやさしいが、それでは本当に覚えることは難しい。まず自分で勉強しろ。それが研究と技術修得に結びつくのだ。」という幸一さんの考えを、和也君はあらゆる面で見事に実践しているのだ。いいかえれば父の子への信頼と責任の分担が、研究心を実行力にあふれたたくましい若者を育てあげたともいえるようだ。

「一日の仕事の予定はきちんときまっていますからね。仕事をしている時、邪魔が入ったら一日の歯車が全部狂ってしまうんですよ。」だから、仕事中和也君は、だれが訪ねてきても口もきかない徹底ぶりだ。

和也君の夢、それは立派な牛づくりに尽きるといふ。だから利益の殆んどは牛の育成に還元されている。成牛を一五頭、それも一頭が四〇五〇万円の優秀な牛を作りあげるのが、夢でもあり、楽しみなのだ。

△施設紹介△

昭和三十三年に芦北町に設立された町立の芦北実務学校は、勤労青少年が学習習慣を身につける上で、とくに自習農をめざす後継者の基礎技術の養成に大きな成果を上げている。

この学校は、①青少年層の都会流出に伴う労働力の減少に対する引止策 ②非行少年の防止にも関連をもった中学卒業後の青少年の教育 ③産業発展は入づくからという三つを目標に誕生したものである。

学校は中央教室と分教室の二重構造で、大野地区にある分教室では一般教養学習を主とし、更に地域と密着した問題をとり上げて研修が行なわれている。中央教室の学習コースは農芸部と家政部の二つ。農芸部は普通作、果樹、畜産、農業機械などの科目が組まれ、家政部には洋裁、和裁、料理、いけ花、保健衛生などの教科目盛り込まれている。また、以上の専攻科目のほか、国語、道徳、時事問題などの一般教養と、体育として男子は剣道を正課としてとり入れ、女子はダンス、ソフトボールなども行なっている。こ

地域にあわせた研修テーマも

—芦北町立実務学校—

の農芸、家政の両部とも、年令、経験別に初等科、中等科卒業直後の者および希望者、中等科、初等科修了者および経験三年以上の者の三段階に分れ、順次進級していく仕組みになっている。

学習期間はそれぞれ一年。中央教室は中学卒業直後の青少年を重点対象としているため初等科は、特に最初の三カ月は、全日登校として、基礎教育を受け、あとは週二回の登校が建前。中等科と高等科は週一回か二回登校し、自分の経営部門にあわせた科目を選び、グループ学習の形で実習を主体とした研修に励む。また、学校に実習地がないため、実習はすべて学校近くの各農家でなされている。

指導員を中心に営農のプランづくり毎年一回か二回、指導員が全生徒の家庭を訪問、親と子とを交えた三者会議で、将来の営農方針を聞いた後、その家の土地が生徒の希望する部門に適しているかどうかの助言をするのも、この学校の特徴の一つ。

一人冥想にふけり、仲間同志で論議する場があるのだ。

「青い鳥」が飛んできて

ある学者の予測によると、今の農村には若者が残り過ぎるといふ。今農村に残っている若者の半数は、途中から農業以外の仕事に移ってしまわないと日本の農業は、世界の農業に太刀打ち出来ないという。しかし、彼らのように有能な青年を十分に生かすことなしに、どうして村の生活を改善することが出来るだろうか。こうして悩める八人のうち一人は幸いにも良きパートナーをみつけた。島田君はこの秋結婚にゴールインする。今ブルイヤングファミリーーズの仲間、その時らしいプランと祝いの歌を思案中である。きつとすればらしい門出を演出するにちがいない。そしてこの祝福は、すべてのメンバーが次々に受けるはずである。その時「青い鳥」の彼であることを信じる。